

田中翠香歌集

『パーフェクトワールド』

(角川文化振興財団)

折々に主体が入れ替わる構成の、異彩を放つ歌集だ。

冒頭では、「雪屋敷千紵」なる人物の作品として、田中翠香の歌が提示される。

重力に選り抜かれて紫陽花へ落ちゆくことを許された雨

次に、考古学者としての歌が続く。巻末の著者略歴に書かれた職業とは違うので、実際の行為をもとにしない想像上の歌として読んだ。

バグダードーハトラ遺跡の旅程表役人の手を思いつく書く

また、「雪屋敷千紵」の歌としての作品群が入る。

セーターの千の縫い目に千の風受けつつ春の街を歩めり

そして、シリア内戦を取材する戦場カメラマンの話をもとにした歌が臨場感を持って展開する。

もう死んだ乳児であれば瓦礫から引き上げるときか片手で掴む

さらにこの後も、主体は入れ替わる。構成は既成の概念からは遠いが、表現面は簡明で定型のリズムの歌が多いため、一首一首は読みやすい。ただ時折、言葉が設定を維持するために働かねばならず、言葉が詩の言葉としての役割を果たす難しさについて考えさせられた。(柴田佳美)

瀬戸夏子著

『をとめよ素晴らしき人生を得よ』

(柏書房)

近年、文学や芸術の歴史において、これまで目立たなかった女性たちの連携に光を当てた論評や研究が国内外で盛んだ。本書も雑誌「女人短歌」(一九四九・九七)に参画した歌人、例えば大西民子と北沢郁子の友情や、葛原妙子と森岡貞香との、理解し合いつつ競い合う稀有な関係に着目し、作品を新たな視点から読み解く。

さらに本書は、女性のみならず男性の歌人や編集者の関与にも注目し、また海外の作家や詩人という補助線も引きながら、この雑誌をめぐる「時代や人間関係のダイナミズム」を捉え直しているところが特徴的だ。

「女人短歌」創設の前夜、すでに男性からも高く評価されていた五島美代子が入会に躊躇いを見せると、長沢美津は「女なら認められない多くの女歌人のために、自分だけのことを考えないで仲間入りするのが当然ではないか」と言ったという。女だけで集まることに対する批判や懷疑への反論として象徴的な言葉だ。このように女性たちが連携し、後に続く女性歌人たちのことも見据えて活動した軌跡は、忘れ去られるべきではないと著者は説く。

早春のレモンに深くナイフ立つるをとめよ素晴らしき人生を得よ 葛原妙子

現代の「をとめ」たちの活躍に至る道を振り返ることで、また新たな道も見えてくるのかもしれない。(田中 泉)